

令和2年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立輪島高等学校 定時制

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果、課題、改善策等）
1 学ぶことのよろこびの実感 [主担当] 学力向上G	① ICTを利活用した授業の展開	ICTの利活用により、意欲的に学習に取り組めたと感じた生徒が A：80%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満	C (59.6%)	成果：最終的に60%を僅かに切って、昨年度実績を若干下回る結果となった。 課題：ICT機器の利用が生徒の学習意欲の向上に必ずしも結びついていない場合もあるようである。 改善策：それぞれの科目の特性によりICTの利用のしやすさに差異はあるが、さらに多くの授業でICT機器のより効果的な活用方法を追求したい。
	② 生徒の興味関心を高める授業の展開	授業に主体的に取り組んだ生徒が A：70%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満		B (66.4%)
学校関係者評価委員会の評価		① ICTの利活用は生徒の意欲的な学習を引き出す方策のひとつで、使用することそのものが目的ではない。今後も工夫しながら有効活用に努めて欲しい。 ② 生徒の欠時がかさんだ背景には、新型コロナウイルスによる生活の変化でストレスがたまり、情緒不安定や生活の乱れにつながった可能性もあるのではないかと。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		① 有効活用できた事例等を教師間で共有しながら、いっそう有効活用できるように努める。特に、生徒の思考を助け、深く考えさせる学習活動につながる教材開発に努めたい。 ② 生徒の心や生活の乱れは、学校や授業への関心の低下と直結するので、生徒の生活面にも気を配り、教師間で情報を共有してきめ細やかな指導を行っていく。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果、課題、改善策等）
2 社会人基礎力の向上 〔主担当〕 キャリア教育 G	① 社会人として求められる挨拶・言葉遣い指導	人前で挨拶や発表する場面を経験できた生徒が A：80%以上 B：60%以上 C：40%以上 D：40%未満	D	成 果： コロナ禍のため、あまり学校行事や里山里海学習を実施することができず、挨拶を体験する機会が少なかった。 課 題： 来年度は学校行事の際に、できるだけ挨拶する機会を持たせる。 改善策： あらゆる機会に時と場に応じた言動ができるように、長期的な展望を持って、今後も粘り強く指導を継続していく。
	② 時間の自己管理意識を高める指導	全授業の出席率 80%以上の生徒が A：70%以上 B：50%以上 C：30%以上 D：30%未満		C (31.3%)
	③ いじめを許さない姿勢の確立	自己有用感が高まったと感じた生徒が半数を超えた行事が A：年10回以上 B：年8回以上 C：年6回以上 D：年5回以下	D	成 果： コロナ禍のため、学校行事などが十分に行えず、周囲の人たちと協力しながら、自分自身の仕事を成就して、自己肯定感を高める機会をあまり得ることができなかった。 課 題： できるだけ多くの学校行事等を活用し、自信を持つ機会を与える。 改善策： 生徒にとって、関心が持てる内容を再考する。
学校関係者評価委員会の評価		①学校行事が少なかった中で、修学旅行などは生徒が言動や時間などを自己管理する良い機会だったと思う。 ②生徒に出席を促すために、先生方が生徒に連絡をする労力は大変だが、根気よく指導してほしい。 ③部活動はチームプレーや自己の責任などを意識する良い機会となるので、活性化を図ってほしい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		①就業している生徒は自分がどう振る舞うべきかを意識できている者が多い。行事だけでなく仕事などの社会経験を積ませるように働きかけ、生徒の自己管理能力を高めていきたい。 ②今年度から遅刻や早退の扱いをより厳密に管理するようにしている。今後もこの取り組みを継続し、生徒が授業の出欠や遅刻、早退について意識できるように働きかけていく。 ③学校や県の代表として大会に出場することは、生徒の自信にもつながるので、部活動の活性化に取り組んでいく。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果、課題、改善策等）
3 地域愛の育成 〔主担当〕 地域理解G	① ふるさと学習への積極的な参加	ふるさとに関する体験学習に積極的に取り組むことができた生徒が A：90%以上 B：70%以上 C：50%以上 D：50%未満	B	今年度はコロナウイルス感染予防のため、里山里海保全活動は高州山登山道清掃活動と袖ヶ浜海岸清掃、千枚田の稲刈りの3回のみで参加率は81.3%であった。本校の活動の中心である里山里海保全活動が行えなかったことは非常に残念に思う。
	② 協働的に活動する場面の設定	生徒に協働的に探究活動をさせる工夫をした教員が A：5名以上 B：4名 C：3名 D：2名以下		コロナウイルス感染予防のため、今年度は調理実習を含め全校生徒での取り組み活動は行うことが出来なかった。
学校関係者評価委員会の評価		<p>①校外活動での体験は普段の授業よりも生徒の記憶に長く残る得がたい経験である。また、生徒同士が協力し、連帯感を身につける有効な方法だと思う。今後も継続して取り組んでほしい。</p> <p>②修学旅行などは、条件が悪い中でうまく実施できたと思う。何よりも生徒自身がとても充実感を持てた良い活動だったと思う。</p>		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		<p>①ふるさと学習・校外活動は本校の教育活動の特徴づける重要な活動である。生徒の行事への参加を促すためにも、事前・事後学習の充実など、日々の授業と行事をより密接に関連づける工夫をしていく。</p> <p>②校外活動は生徒のモチベーションを上げ、定時制高校へ通う意義を見いだすきっかけにもなる。今回のコロナ禍をこれまでの行事を見直し、新しい取り組みを始めるチャンスととらえ、体験学習の内容や種類を工夫して今後も継続していく。</p>		